

## 一つの期待

(大阪)

中島 龍太郎

大会も近づきました。事務局の諸兄の御骨折に感謝いたします。農村の調査研究から遠ざかっていたため、通信の御依頼に対しても御無沙汰を続けてきましたが、秋風と共に大会の成果を期待する気持ちから感想めいたことをのべてみます。

本年度の課題「村落と政治」は、昨年に劣らず大きなテーマであるだけに、また色々の立場からの論議が盛んに行われるであろうと予想しています。町村合併、選挙、政策の実施過程、地域社会の変動等に関する最近の調査報告が示唆しているように、ムラを包括的な政治的・経済的体制の一環として把握するには、今までは異なった新しい分析方法や枠組の工夫が要請されると思っています。この点については、特に農村社会学で用いられてきたような、いわば政治体制の機能のつまるところから出発した発想法にも吟味が加えられるであろうし、またマクロな次元の分析の個性に於て獲得されてきた成果を再検討し、それ

に新しい意義を与える機会を、この課題の究明に託することも出来るのではないかと思われます。

ところで、村と政治体制の結び付きを明らかにするには、多くの要因や変数が与えられておりますが、論議を集中的にし、また村の現実から離れないためには、幾つかの戦略的な目標を設定し、これを中心に意見の交流がなされることが望ましいでしょう。前号通信でも指摘されたように、ムラのボスの性格や機能の比較検討は、たしかに一つの焦点をなしています。私はこれに加えて、またこの分析を一層有効ならしめるためにも、ミクロな次元での部落の意志決定機関である各種の会議や寄合の性格や機能、その特質を明らかにするたが役立つのではないかと考えてみました。

オ一に、部落に対する権力統制やこれに対するムラの反応―逆統制のメカニズム、ボスのムラ支配のメカニズムは、通常は村の意志の正統性を公認し保証する各種の会合の機会に象徴的に現象すると考えられます。農民自体の運動や行政権力の部落掌握がこの機会をどのように利用しているか、各層の共同組織や集団が、村の意志決定にどのように参加しているか、個人、組織、役職の何れに主導性がおかれているかなど問題は多いと思えます。オ二に、村の政治を動かす個人々の特性・資格は、部落意志形成の状況によつて大きく左右されるでしょうし、他方、所謂構造分析

の対象となる家や諸集団の結び付きも、政治的過程としてみれば、阿らかの意志決定の機関を媒介にして機能するでしょう。調査技術上の制約もさること乍ら、この過程の分析が不充分であるために結果として要因間の結び付きについて機械的な説明に止まつている場合が多いのではないかと思えます。三、村の寄合の分析は、マクロ的には村の役職者支配と独占段階の官僚統制、寄生地主の村統制と絶対主義的天皇制の対応にかゝるような機能の適合関係と、外部動向に対する村の政治的中立化や「共同体的」抵抗の傾向についての内面的根拠を明らかにするのに役立つでしょう。また、村八分といった現象形態も、それが発動する方法や状況によつて、異つた政治的機能を果たすこと、またその正統化が多分に権力によつて保証されていることも見逃せないと思えます。

以上、たいへん舌たらずの説明で、たいと思ひ付きをのべたにすぎません。たゞ、今度の大会で報告を予定されている神谷力氏の「明治初年における入会権の内部的变化と村方体制の変質過程について」の論考(法制史研究九号)は、主として入会地の帰属主体の変遷を取扱われたものですが、そこで、戸長管区制を契機とする村方支配の再編成の際に、村によつて町村合行政―地主村方支配、三長会行政―役職特権者の村方支配、惣集会行政―農民の共同体的村方支配の分化が見られたとの指摘から示唆をうることができました。こ

のような村方支配の結類型が、現在の農村の  
場合どの様に構造化されてきているかについ  
て、大会の報告に期待しつつ筆をおきます。